



白羅紗陣羽織 14代將軍徳川家茂所用

目 次

博物館建設の想いで.....	松浦 国男.....	2
久能山東照宮所蔵の衣服の遺品について.....	栗原 澄子.....	3
史料紹介 伊達政宗書状.....	小林 明.....	8
博物館のあゆみ——昭和50年度——.....		12

博物館建設の想いで

館 長 松 浦 国 男

当館所蔵の宝物は、東照宮の御祭神徳川家康公の御遺品を始め、歴代將軍の武具、甲冑、刀剣、書画等二千点余りにも及び、徳川時代史の縮図とも謂われて居ります。

これらの宝物は、大正四年、久能山東照宮遷座三百年祭の折、記念事業として建立された宝物館に大部分が保存展示され、一般参拝者に公開されて参りました。

この施設は、当時としては建築界の最先端をいつた立派なもので、建坪三十坪、屋根はスレート葺、人造石造りのモダンな建物でありました。

しかし、その後、時代の推移と共に、文化、経済等の進歩に伴ない、この宝物展示館も近年、何かと不備を感じてまいったのであります。中でも一番困った事は、館と東照宮社務所（事務室）が地形の関係で少し離れたところにあり、しばしば、盗賊にねらわれたことでした。

昭和三十二、三年頃と記憶して居りますが、東京国立博物館の客賓として来日されましたアメリカのドクター・コンプトン氏が、同館の紹介で、主として刀剣拝観の為に来館され、小生が県教育委員会文化財担当官と御案内申し上げたことがありました。その節、コンプトン氏が戦後アメリカに流れた刀剣を自費を投じて買い上げたうえ、立派な収蔵庫を作り、日本人にも負けない保存管理に尽力されて居る由を承ったのであります。

さて、氏が帰国後、礼状に添えて当館の刀剣を賞賛したのでありますが、それとともに宝物館施設が余りにもお粗末であることを嘆かれ、今後の保存管理の指導方を国立博物館に寄せられた由、聞き及び、赤面した次第でありました。その後、県教育委員会からも『折角立派な宝物があるのだから』と、保存管理施設の備った館の建設をうながされたのでありますが、当時の東照宮の状況では如何ともしがたかったのであります。

昭和三十七年七月、白井光男氏が東照宮の宮司に就任されたのを機に、来たる昭和四十年の御祭神家康公薨後三百五十年大祭の記念事業の一つとして宝物の収蔵庫を兼ねた博物館建設の話が進められたのであります。

その後、この建設工事も予定通り完成を見、神社界としては、おそらく最初の登録博物館の誕生ではなかったかと思われます。

想えば、今日の博物館は、コンプトン氏の御忠告がきっかけになったようなもので、氏に改めて敬意を表しますと共に、再度、来日の機会がありますならば、是非新装なった博物館の御見学を願う気持で一杯です。加えて、これらの宝物を、明治、大正、昭和の各時代、特に戦後の混乱期に保存されてこられた歴代宮司に深く感謝を捧げますとともに、今後、益々博物館本来の活動である文化財の保存顕彰に一段と努力してまいる所存でございます。

久能山東照宮所蔵の衣服の遺品について

福島大学講師 栗原 澄子

久能山東照宮に収蔵されている衣服（繊維）の遺品類はきわめて多い。

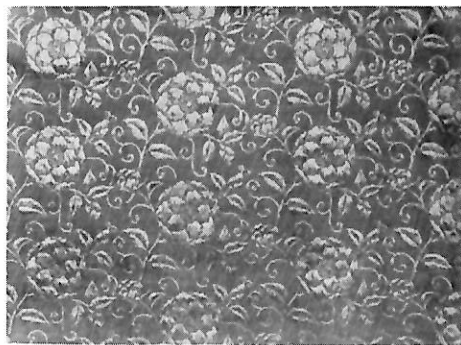
これらは、三社（東照宮・日枝神社・稲荷神社）の御祭神の御神衣として奉納された白御神衣と伝称される二ツ衣からなる桂三種を除けば、他はほとんど歴代の将軍が使用されたという衣服・装身具類である。

神社の宝物台帳によれば御祭神（家康）の御料は、江戸時代に久能山東照宮へ納められ、他は徳川家に伝えられたものが、明治になってから寄贈されたということである。

しかし、衣服・装身具類は、家康から慶喜に至る歴代の将軍のものがすべてあるわけではなく、宝物台帳によれば、初代家康・四代家綱・綱重（家綱の弟）・六代家宣・八代吉宗・一二代家慶・一三代家定・一四代家茂の使用したものとされている。

現在（西暦1976年）久能山東照宮に納められている衣服（繊維）の遺品類は、著者の調査によれば六九点であり、これらを宝物台帳の伝称の名称通り記述すると、袍六領、腰帶三本・下襲四領・単二領・表袴二腰・刺貫（指貫）四腰・大口二腰・直垂二領・胴召一八領・胴着二領・着龍三種・立付（裁着け）一三腰・陣羽織五領と、先に述べた御祭神の御神衣である二ツ衣からなる桂三種の六九点である。

これらの遺品類の中で、公家の装束にならった束帯・直衣の類は、神社の宝物台帳にしたがえば、すべて家康使用のものといわれているものである。これらは著者が報告させていただいた室町時代の製作と考えられる熊野速玉大社の御神衣類・阿須賀神社の御神衣類・熱田神宮の御神衣類（桃山・江戸期製作と思われるものも含む）と一見大差ないようにみうけられるが、久能山東照宮の遺品類は使用されている生地の変遷の跡が形態の細部（部分的に）の各所にみとめられた。例えば、文様のうへでは、表袴の



桃山期らしい文様

白地八重梅唐草文浮織物や白地八重梅唐文綾の文様は、明らかに桃山時代の特色を現わしたものであり、直衣の白地小葵文紗や、下襲（表が白地小葵文綾で、裏が紅地横遠菱文綾）の表地の文様などには、従来の小葵文とは異なる伊勢小葵（伊勢神宮の遷宮の時に奉納される装束類に使用してある小葵文様で、伊勢神宮の村瀬美樹先生は『神宮』の中で、この文様を神宮小葵という名称で呼ばれている）の文様が使用されていたり、徳川家のものらしく三葉葵文をあしらった丁子唐草文様のものも多く用いられていた。形態や仕立方のうへでは、袍の両脇に付けてある小紐は、それを前で結ぶと後身丈が着用者の着丈におのずからなるように工夫されて糸が付けられていたり、夏物の表袴（白地八重梅唐草文綾）が単（裏地がない）であったり、冬物の表袴（表は白地八重梅唐草文浮織物・裏は紅平絹）は、表と裏の腰紐のとじ方は従来どうりの仕立方であるのに、夏物の表袴（白地八重梅唐草文綾）のそれは、とじ方が現代も宮中で行われている仕立方に似たな結びがされているものなどもあった。

また、単二領あるうちの一領（紅地三重襷文綾）と、下襲四領あるうちの一領（夏物、紅地



にな結び

は胴服となっているが、服装史のうえでみられる身巾が広く、脇に裾などの入ったものや、襟の折れ返ったもので、いわゆる現代の羽織に似たようなものとは異なるもので、美しい文様などが付けられたものではなく、裾は五〇～六三cmあるが、着丈は短く、袖は丸味のある一領を除けば、他はすべて筒袖であり、両脇又は背縫いの裾寄りに明きがあることを除けば、現代の男児の産着に似た形態のものである。・胴着・立付（裁着け）・着籠・籠手・鉢巻や復活した直垂などもあり、その形態や縫製方法も、従来の遺品類の仕立方や、中国・朝鮮などの影響以外に、ポルトガル・オランダ、その他西欧の影響も受けたと思われるものが沢山見出された。

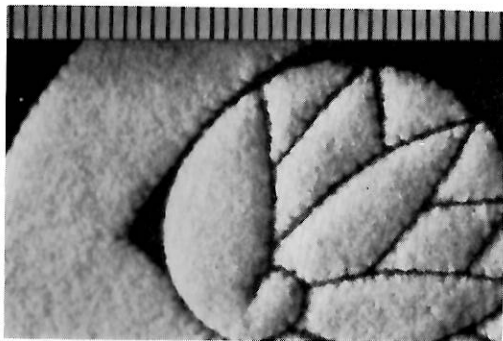
時代的変遷がみられるものでは、胴召の縫い方のうえでは、

- A 単 イ、襟下は従来の単類にみられるように耳をそのまま用いているものや、三ツ折ぐけのものもあった。
- ロ、衽付け縫代は、現代の浴衣などのように耳をそのまま用いて耳ぐけしてあるもの。現代の子供物のように、縫代の裁ち目をみせないように袋縫いにしてあるものもあった。
- ハ、袖下縫代は縫代を後袖側へ片返して裁ち目を更に折って後袖にくけつけてあるもの。逆に前袖側へ片返してくけつけてあるもの。袖に丸味のつけてあるものは、袖下縫代を後袖に片返して、更に〇・五cm先で前袖の縫代を前袖側へ折り返し、後と前の袖下縫代の裁ち端を折って前後袖にくけつけてあるものもあった。
- ニ、裾は、一cmくらいの三ツ折りにしてくけてあるもの。一・五cmのものや、一三cmもの深い三ツ折りにしてくけてあるものもあった。
- ホ、背縫いは一度縫いのもの、二度縫いのものもあった。
- ヘ、襟は、裏襟の付けてないもの。裏襟が別^{べつ}ぎれでつけてあるもの。表と裏襟を表からの襟でひとつづきにして裏襟をかねてあるものもあった。
- B、袷 背縫い・衽付けが従来の袷類のように四ツ縫いのもの。現代の袷のように表と裏を別々に縫ってから、とじ合わせてあるものもあった。
- C、綿入れ イ、裾のふきが五cmくらいのものから、〇・五～〇・三cmくらいのものもあり、毛抜合せや、逆に裏が控えられているものもみうけられた。
- ロ、袖口も、ふきの出ているものや、毛抜合せのものがあった。

以上のように、わづか一八領の胴召でも、従来の袷類の仕立方から、現代の和服の仕立方の技法を生み出すまでのもの、模索時代の過程のものと考えられるものがみうけられた。

また、西欧裁縫の影響と思われるものは、胴着や着籠・陣羽織の立襟（現代呼ぶバンドカラー）。外廻りに巻かれた玉縁巻き（着籠のように中にハガネの入るものは、このような技法が

最も合理的であり、これ以外の方法は考えられないとも思うが)・玉縁ぎれも初期の縦地使用から、正バイアス地使用までの変遷の過程のもの。陣羽織の背の家紋などは、現代洋裁で使われているかけはぎで現わされているものや、現代の手芸のフランス刺繍などで呼ぶコーチング刺繍のさしかた・アップリケ刺繍などの技法が用いられているものもあった。そして、陣羽織の前の止めや、鎧直垂の袖口の紐(つゆ)を通す部



アップリケ刺繍

は、すべりが良いため絹を用いたという実用的面からと思われるが、当時の社会事情をしのばせるものらしくもみうけられた。

陣羽織や、胴召・胴着類にみられる徳川家の家紋である三葉葵の葉脈の数は、三五葉・三三葉・二三葉・一九葉・一三葉・九葉など様々あったが、胴召はほとんど一三葉であるのに、胴着や陣羽織はその数が様々あるのは、陣羽織や胴着の紋所は、デザインとしてとか、標識としてとか、その他の意味かで、その数は一様ではないので、久能山東照宮保管のものだけでなく、徳川家の衣服類のすべての三葉葵の葉脈数についてしらべて、どのような使い分けがされているかを明らかにするのも今後の研究の課題と思われる。

また、紫羅紗の陣羽織の脇縫いはミシン縫いであった。神社では、これら遺品類は未だ補修はされたことがないものといわれるが、著者は、これは後世の補修時にミシンで縫い直されたと考えられる点がみうけられるので、これは今後の研究により明らかにしたい。

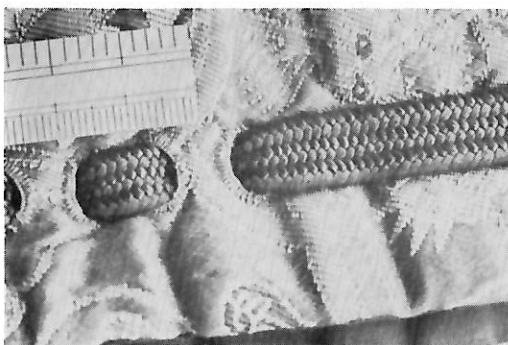
以上のように、久能山東照宮にある衣服の遺品類は、神社の宝物台帳によれば、家康から家茂までの二六三年間のとびとびの時代の将軍使用のものではあるが、初期から末期に至るまでのものは、その使用されている生地・形態・縫製(用いられている糸類・その針はこびその他)その他は、それぞれの時代の社会状態(当時の生活様式や外国との貿易・外国文化の影響・当時の経済事情等)を物語るものばかりで、従来遺品類にはみられなかった手法が多く見受けられたので、被服史研究の上に、特に縫製史の研究のうえには非常に貴重な資料といえよう。



立襟と外廻りの玉縁巻き

分や、立付(裁着け)の足の紐を通す部分などには、現代洋裁で使用している穴かがりに似た手法が用いられていたり、ボタンが使用してあるものなど、西欧裁縫の影響と思われる製作方法も各所にみとめられた。

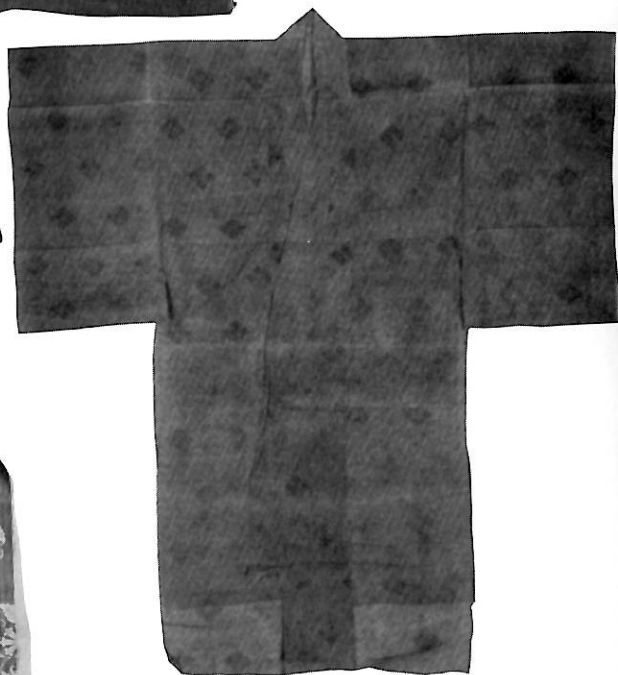
一二代家慶や一三代家定、一四代家茂の使用といわれている立付(裁着け)は、表が縹木綿で裏が平絹(縦糸と緯糸が紅と縹で織られている)を使用してある。これ



穴かがりに似た手法



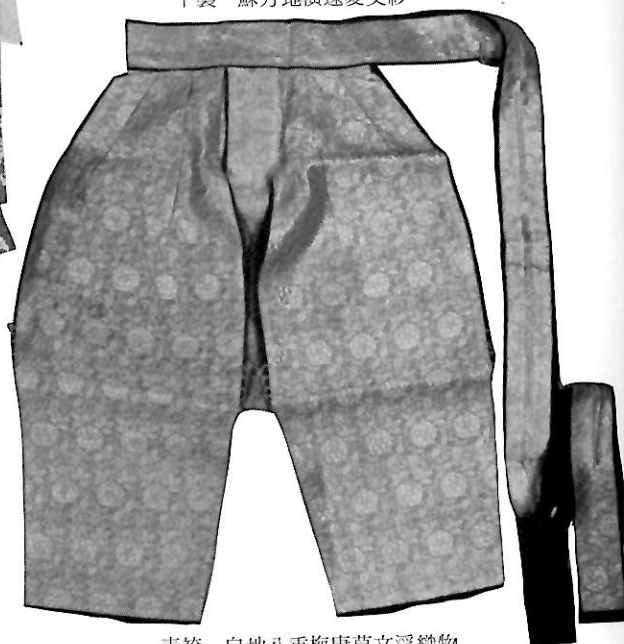
袍 黒地三葉葵丸文丁字唐草文紗



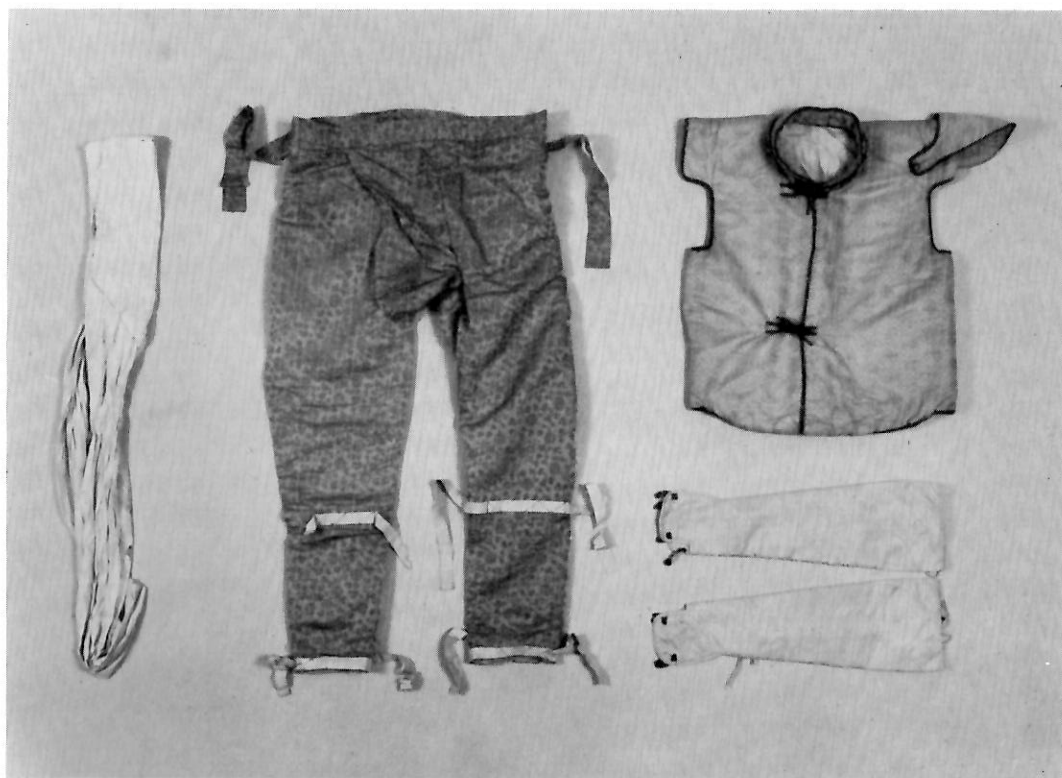
下襖 蘇芳地横遠菱文紗



指貫 縹緯白地丁字車唐草文固地綾



表袴 白地八重梅唐草文浮織物



着 籠（八代将軍吉宗所用） 上衣 淡香地襷四方文緞子 袴 淡香地菊唐草文緞子



胴召 縹平絹（十二代将軍家慶所用）



立附袴 黒地火焰牡丹小花唐草文緞子
（十四代将軍家茂所用）

史料紹介

伊達政宗書状

学芸員 小林 明

伊達政宗（永禄十年～寛永十三年）は独眼竜の異名をとるほど戦略戦術に秀でた武人であった反面、茶道、香道、歌道にも精通し、書もよくした。政宗の筆蹟が今日多く伝存しているのは、能書として政宗在世中より高く評価され、珍重されてきたからともいえるだろう。

当館にも政宗書状が二通伝えられているので、ここに紹介する。



(一) 伊達政宗書状

大御所様（為力） 宰相様（御煩力）

直ニ還御被成之由、為御

知不始辱候、先刻及

承候条、川越へ佐州迄

以使者申候、然者十六日御茶

之事真実ニ候、入思召候て

辱候く、恐惶謹言、

霜ノ十三日 政宗（花押）

(一) 伊達政宗書状

伊達政宗の自筆と認められる書状である。宛名を欠き、解読不能な箇所があることは惜しまれるが、慶長十六年（1611年）霜月十三日のものと推定する。政宗、時に四十五才。文中の「大御所」は徳川家康、「宰相」は家康の九男義利（のちの義直）、「佐州」は本多佐渡守正信である。

慶長十六年十一月（霜月）五日、関東で放鷹中の大御所家康は忍に鷹場を移した。政宗が国許の仙台をたち、久喜に到着したのは、この月の七日のことである。政宗の到着を待ちわびた家康は、早速使者を遣わして、九日夜に政宗を御前に召した。政宗がこの時、家康に献上した五羽の鷹は、いづれも家康の御意にかなった。翌朝、政宗は鴻巣の將軍秀忠を訪れ、ここでも鷹一羽を献じた。秀忠もまた、これに満足し、政宗を厚くもてなした。

しかし、政宗が家康のもとへ参上したのは、八日夜のことであったという記録もある。いづれにせよ、政宗がこの頃、関東方面で放鷹中の大御所家康や將軍秀忠の身近かにいたことは確かである。（『伊達治家記録』は、この時、政宗は仙台にいたとし、『伊達政宗卿伝記史料』もこれに因っているが、ともに誤りである。）

家康の子、義利の発病を伝える使者が、忍の家康のもとを訪れたのは、この数日後、十二日のことであった。

義利は、慶長五年（1600年）十一月に家康の第九子として生まれ、同十六年三月二十日、右近衛権中將・参議に任ぜられ、この時、駿府で養育されていたが、当時流行していた疱瘡にかかったのである。

義利の身を案じた家康は、直ちに帰城しようとして、十三日に川越に至り、折から知らせをうけてやってきた將軍秀忠と対面し、十四日には武蔵府中に到着した。そして、十五日に駿府よりの使者に会い、義利の疱瘡が軽症であることをしり、漸く安堵して、それよりのんびり放鷹しながら駿府へ向ったのである。

本書状は、まさにこの家康還御の一件を伝えるものと思われる。解読不能な箇所に、仮りに「為」、「御煩」の文字を補入すると、

「大御所様が、宰相様の御病気のために、直ちにおかえりになられるとのこと、お知らせをいただき、いつもながらの御好意かたじけなく存じます。先ほど、そのことを承りましたので、川越の本多佐渡守殿のところまで使者をたてて申し伝えました。ところで、十六日のお茶の事は本当です。お心にかけていただきかたじけなく存じます。」

と、手紙の内容を解釈出来よう。

家康が、忍の鷹場を引き揚げ、江戸へ帰るという知らせが、政宗のもとへ届いたのは、十二日夜か、十三日早朝のことで、その帰りの道筋にあたる川越にいる本多正信にそのことを伝えた政宗は、早速情報をもたらした人物に親しく筆を執って、その好意を深く謝したのであった。また、政宗はお茶の事にもふれてはいるが、この月十六日の茶事に関する記録は見当らない。

（紙本墨書、縦三〇・〇×横三三・〇センチ）

(二) 伊達政宗書状

本書状もまた、全文政宗の自筆である。政宗が松平姓を許され、陸奥守に叙任されたのは、



(二) 伊達政宗書状

万々期明日候、かしく、

御懇書忝候、明日之

義必と存候、自然替義候者

可申入候、早々可罷出候、

恐惶謹言、

五月廿六日 政宗 (花押)

松陸奥守

政宗

(檢封)

ニ一

立左近様

御返答

慶長十三年（1608年）正月のことである。以来、政宗は寛永十三年（1636年）五月に逝去するまで、松平陸奥守を名乗り、その文書に署名している。

しかし、本書状にみられる政宗の鶴鶴花押は、その形態から慶長・元和期のものと推測できる。また、手紙の内容から、政宗が仙台にいてしたためたものでないことは明白である。さらに、五月二十七日を重視し、政宗の動静をみて、本書状を元和五年（1619年）五月二十六日、立花左近将監宗茂にあたえた返信としたい。

立花宗茂は、『寛政重修諸家譜』巻第百十二によれば、高橋紹運の長男で、戸次鑑連の養子となって立花宗茂を名乗り、天正十五年（1587年）七月二日、従四位下侍従に昇進し、左近将監と号した。元和八年（1621年）十二月二十七日、將軍秀忠の命で、養子忠茂が左近将監を称するに及び、飛騨守に改め、寛永十九年（1642年）十一月二十五日に卒している。

従って、本書状が元和九年以降のものであれば、宛名の左近将監は忠茂となる。

元和五年四月、將軍秀忠は上洛する準備にとりかかり、諸大名にその供奉を命じた。そこ

で、政宗は先駆となって四月二十六日に江戸を出発し、五月十六日に上京した。将軍秀忠の上洛は、予定より少し延引するとの風聞もあったので、人々の間では、いろいろとりさたされたにちがいない。このような中で、在京中の諸大名の一人である立花宗茂は、将軍家の信任厚い政宗に、将軍上洛の日時を確かめるため、書状を以て問うたのであろう。政宗は早速返事をしたため、宗茂のもとへ遣わしたのが、本書状とみられる。

「御懇書忝けのうございました。明日のこと（将軍の上洛のことと思われる）は、まちがございません。万一、替るようなことがあれば、ご連絡致しましょう。明日は早々より参上するつもりです。万々は明日に」と解釈できる、ひじょうに簡潔な文である。

政宗の言葉通り、将軍秀忠は、二十七日に山科で公卿、諸大名の出迎えをうけ、その日のうちに無事、伏見城に入った。

立花宗茂がこの時、政宗等と行動をともにしたであろうことを裏付ける史料に乏しいが、『本光国師日記』二十六により、この頃、宗茂が伏見にいたことはまちがいない。

（紙本墨書、縦三一・三×横四六・三センチ）

〔参考〕『伊達政宗所用印・自署花押』 仙台市博物館「伊達政宗展」より

- | | |
|-------|-------|
| 1～6 | 天正十六年 |
| 7～10 | 天正十七年 |
| 11～12 | 天正十八年 |
| 13 | 天正十九年 |
| 14 | 文禄二年 |
| 15 | 文禄四年 |
| 16 | 慶長五年 |
| 17 | 寛永三年 |
| 18 | 寛永十一年 |
| 19 | 寛永十三年 |



博物館のあゆみ

昭和50年度

館内業務

1. 特別展

- 徳川歴代将軍の武具名宝展
会期＝昭和50年4月1日～6月30日
徳川将軍の所用した武具の優品を展示。
- 徳川慶喜公展
会期＝9月14日～11月30日
徳川慶喜の遺品を中心とした展示。
- 徳川十五代の甲冑と刀剣展
会期＝昭和51年1月1日～3月31日
徳川将軍の甲冑と刀剣の名品を展示。

2. 友の会活動

- 4月13日 「久能山の歴史と文化財を語る集い」へ参加。
- 7月27日 映画会に参加し「東海道五十三次」「桂離宮」を鑑賞。
- 8月24日 第10回文化財入門講座「古筆の鑑賞」へ参加。
- 10月19日 第4回友の会研究発表会へ参加。

3. 文化財入門講座

- 第10回文化財入門講座
 - ・期日＝昭和50年8月24日
 - ・講題「古筆の鑑賞」
 - ・講師 美術家 福田喜兵衛氏

4. 資料の撮影について

昭和50年10月6日より9日まで4日間所蔵染織類の写真撮影を(株)大塚巧藝社写真部に依頼し行った。

5. 刀剣類定期手入れについて

昭和50年11月8日、掛川市の刀剣研磨師池田猪太郎氏の手により行われた。

6. 刀剣類の研磨について

昭和51年3月24日、池田猪太郎氏に太刀銘宗近一口の研磨を依頼した。

7. 資料の補修について

昭和50年5月31日、榊原月堂書幅を表装し直した。

8. 館報の発行について

昭和50年11月27日、館報第6号（昭和47年～49年度報告）を発行した。

館外業務

1. 資料の出品について

- 「静岡市文化財資料館開館記念特別展」

会期・昭和50年5月1日～6月29日

会場・文化財資料館

東照大権現画像、火縄銃他3点を出品。

○「はままつの歴史展」

会期・8月8日～20日

会場・浜松市 西武百貨店

東照大権現画像（天海賛）を出品。

○「明治から昭和へ」（第6回熱田神宮文化史展）

会期・10月26日～11月24日

会場・熱田神宮宝物館

徳川慶喜画像を出品。

○「日本の刀装展」

会期・昭和51年1月1日～2月1日

会場・熱田神宮宝物館

重要文化財打刀拵を出品。

○「徳川將軍展」

会期・昭和50年4月1日～11月30日

会場・日光東照宮宝物館

甲冑・染織類等30点を出品

2. 静岡県博物館協会総会について

期日・昭和50年7月22日

会場・当館一階

昭和50年度総会が開催され、松浦館長、小林学芸員、西野会計主任が出席。

3. 東海地区博物館連絡協議会総会について

期日・昭和50年6月17日～18日

会場・神奈川県箱根町まとい荘

昭和50年度総会が開催され、松浦館長、小林学芸員が出席。

4. 全国博物館大会について

期日・昭和50年10月27日～29日

会場・東京国立博物館

第23回大会が開催され、松浦館長、小林学芸員が出席。

5. 静岡県文化財保存協会総会について

期日・昭和50年6月18日

会場・静岡浅間神社

昭和50年度総会が開催され、西野会計主任が出席。

6. 研究交換会について

期日・昭和51年3月3日～4日

会場・伊豆熱川バナナワニ園

静岡県・神奈川県両博物館協会共催で開催され、松浦館長、小林学芸員が出席。

7. 学芸職員研究集会について

期日・昭和51年2月12日

会場・駿府博物館

静岡県博物館協会の主催で開催され、小林学芸員が出席。

庶務報告

1 昭和50年度入館者状況（但し、有料者のみ）

区分 月	大 人	小 人	団 体	計
4 月	7,420	1,437	153	9,012
5 月	6,767	887	608	8,262
6 月	4,191	172	520	4,883
7 月	3,648	316	169	4,133
8 月	6,999	2,251	264	9,514
9 月	4,167	411	546	5,124
10月	4,117	224	1,075	5,416
11月	4,552	524	595	5,671
12月	1,740	170	45	1,955
1 月	6,133	1,048	98	7,279
2 月	6,008	417	375	6,800
3 月	8,243	1,807	964	11,014
計	63,985	9,664	5,412	79,061

2. そ の 他

○4月1日より入館料を下記のごとく改正。

大人 200円・小人 100円（団体 大人 160円・小人 80円）。

○福島大学栗原澄子氏が当館所蔵の染織類の調査を下記の期日に行った。

4月9日～11日、26日～28日 5月25日～27日 7月24日～25日 11月19日～20日

○7月8日 国学院大学博物館学講座受講生38名が博物館見学のため来館。

○7月16日 館内の塩害防止装置の取替作業が行われた。

○8月20日より館内案内の放送が開始された。

○8月19日～28日 家政学院大生竹本志保美が博物館実習を当館で行った。

○11月1日 牧田三郎氏が金扇馬印修理のことにつき来館。

○1月26日 防火訓練を行った。

○2月29日付にて嘱託森威史が退職した。

○3月9日 埼玉大学教授丹野郁氏が当館所蔵の染織類を調査した。

○3月18日 館外向の案内放送を開始した。

○3月25日 高松宮妃殿下が御来館。



修理することになった徳川家康所用の金扇馬印。竹骨絹張金泊押。
長さ219.3cm（県指定文化財）。



講師に美術家福田喜兵衛氏をお招きして開講した第10回文化財入門講座「古筆入門」。

久能山東照宮博物館報

— 第 7 号 —

昭和52年 3 月31日 発行

編集発行 久能山東照宮博物館

〒422 静岡市根古屋390

TEL. 0542 (37) 2437